

バルトンと鳥海たへ子さんの遺稿から

稲場紀久雄

鳥海たへ子さんはバルトン先生の孫にあたられます。

彼女は四年前、一九九〇年三月に亡くなられました。長女の幸子さんが遺品を整理されている過程で、一冊のノートと数枚の原稿用紙に書かれた遺稿が見つかりました。本当に小さなノートです。このノートに原稿が挟んでありました。字数にしますと全部で一万字程度のもんです。読んでみますと、たへ子さんのお母さんのタマ子さん、バルトン先生のたった一人の忘れ形見ですが、そのお母さんから聞いたことが書かれてあります。それから随分お世話になったと何度も書いてあるんですが、ベルツ・花さんから聞いたバルトン先生の人となりも書かれてありまして、非常に興味深いものであると思ったん

です。

そこで、なんとか遺稿を広く皆さんに読んでいただけないだろうかと思ひまして、運営委員の皆さんとその取り扱いを相談しました。ところが皆さんぜひ一冊の本にして、公にしようじゃないかというご意見でした。この本は、こういう研究会があったからこそ、出版できたんです。ただ、一万字程度のものですから本にならないということもございまして、実はここにはその他に短歌がかなりおさめてあります。

以前にも申し上げたことがございますが、たへ子さんは、短歌の才豊かな、もっと一般的に言えば芸術的才能の非常に豊かな人でございまして、素晴ら



鳥海たへ子さんの遺稿と下水文化叢書「霧の中から」

しい短歌がたくさん残されていたのです。それも新聞の折り込み広告みたいなものいっぱい書いてありました。それをお嬢さんの幸子さんが丹念に書き出して、原稿として保存されていたんですね。そういったものをお借りしまして、その中からいいなと思うものを二〇〇首ばかり一緒におさめまして一冊の本にしたわけでございます。

遺稿の中に「亡くなった母が物心もつかないときに死に別かれた祖父のことをどう書けばよいかと思ひ、まるで深い霧の中を手探りしているようなものどかしさを感じます。」と書かれた一節があります。そこで、ここの「霧の中」という言葉を取りまして、この本に「霧の中から」というタイトルを付けてはどうかと考えました。お嬢さんの幸子さんとも相談しまして、それで結構ですというようなことでタイトルにしました。言うまでもなく、この遺稿にはもともとタイトルってないんですよ。しかし、出版する以上はやはりタイトルが必要だと思ひまして、こういった文章から取ったわけです。



この本を何人かの人に送りました。そして非常に
おもしろい葉書が一通返ってきました。司馬遼太
郎先生から返ってきたもので、このように書かれて
います。「鳥海太郎先生の遺稿、霧の中からを拝読、
鳥海一郎夫人だったかと驚きました。鳥海さんは昭
和三年ごろ、遠くから見たことがあります。白髪、
長身の人のようでした。鳥海さんは戦後、まだペー
ジ数の少なかった時代、大阪朝日で映画評論を書い
て評判だった人です。」

司馬遼太郎さんは、この本が出る前の年文化勲章
を受賞されたのですけれども、この遺稿集を読んで、
司馬先生が若くて、まだ無名のころ、人垣の遠くか
ら鳥海一郎さんを見て、しかもその鳥海一郎さんと
いうのは映画評論でとっても評判を取った、大阪朝
日新聞社の学芸部長だったんですね。ある意味では
当時、司馬先生の憧れの人だったのかもしれない
ね。そんなことで、実はこういう葉書をえらく小さ
な字で、いっぱい書いてよこされました。

鳥海一郎さんという方は昭和三十七年に亡くなって

おられます。五〇才でした。その一年前、昭和三六
年にたへ子さんはピアノ教室を開かれました。近所
の子供たちにピアノを教えるはじめてから一年ほどし
てご主人が亡くなられて、実は趣味でピアノ教室を
開いたのが、はからずも生活の糧になったといいま
すか、あるいは生きがいにもたふんだったんだと思
うんです。そして一九九〇年に亡くなられるまで大
勢の子供たちにピアノを教授されました。大変子供
たちから慕われた先生だったそうです。そのピアノ
教室を引き継いで、お嬢さんの幸子さんがまたやっ
ておられるというようなことで、非常に人気のある
ピアノの個人教授とうかがっております。

実は鳥海たへ子さんと私との接触は昭和五三年の
初夏なんです。突然、鳥海さんのお宅に訪ねていっ
たわけです。といいますのは、バルトン先生の墓碑、
今日見ていただく青山霊園の墓碑の裏に満津子さん
の墓碑銘も書いてあるものですから、この墓碑の所
有者は誰だろう、管理者は誰だろうと思って、二年
ほど探し求めたんですが、鳥海たへ子さんだという

ことがわかって、昭和五三年初夏に訪ねていったん
です。ところが、残念なことに、その時たへ子さん
は大腿骨を骨折されて入院されていたんです。お宅
におられたお嬢さんの幸子さんから私が訪ねてきた
趣旨をお聞きになり、会えなくて非常に残念だと思
われたわけなんです。

そこで、たへ子さんは病床で私に宛てて、手紙を
書かれたのです。手紙というより、バルトン先生に
ついての自分の思い出を整理されたようなものでは
ね。それを幸子さんに託されて送ってこられたその
後、半年ほどしまして、昭和五四年一月に直接お会
いすることができたわけです。当然、そのときには
退院されていました。

私にとってはある意味では、手紙が残ったのは、
実は幸いだったんです。この手紙には興味深い話が
いろいろ書かれています。例えば、「バルツ夫人や
母からきいた所によりますと祖父は世間に名前が出
る等のことは一切無頓着であったため随分業績を残
しながら人に知られる事が少ないとのことでした。」

とか、「祖父の人は何しろ母が五才位の時になくなつて居りますので、母が祖母満津子から聞いた話」と最後まで親しくして頂いたベルツ・花夫人から聞いた話等で、誠にとりとめのないことばかりです。大変お酒が好きだったとか、新しい帽子にオタマジャクシを入れて帰ってきたとか、そんな話ばかりです。いつもポケットウイスキーを持っていたそうです。私の考へではそれも時々、やり切れない気持の時があったのではなからうか等想像いたします。飄逸なところのあった人のようです。」というようなことが書かれてあるのです。

私、実は「下水道論の歴史的探訪」という本の中で、この手紙を生かしているんです。例えば「新しい帽子にオタマジャクシを入れて帰ってきた。」の下りのところをちょっと思い出してみますと、こんな場面を設定したんです。バルトン先生が朝、大学に出かけます。そしてしばらくするとガラガラと玄関が開いて、大きな声で「タマちゃん。」と呼ぶわけです。そして奥さんの満津子さんとタマさんが出

てきて「何ですか。」「これを見てごらん。」と言つて真新しい立派な帽子を見せるわけです。オタマジャクシが当然そこに入っています。「オタマジャクシだよ。」つて。オタマジャクシって何か、まだ小さい子供ですからわからないかもしれません。恐らく三才ぐらいでしょうか。亡くなったときに五才というぐらいですから、このころは三才ぐらいかもしれないと思ひまして、三才ぐらいと想像してみて下さい。「オタマジャクシってなあに。」「カエルの子供だからピョンと跳ねる。」そして、バルトン先生が跳ねる仕草をして見せます。そしてタマちゃんも一緒に跳ねる真似をします。そして二人で庭中を跳ねて回ったという場面。実はこの場面は、この行から想像して見たわけです。

あるいはポケットウイスキーのところなどいろいろやるせない気持、当然ですよ、スコットランドから来まして、長年日本にいるわけですから、時には故郷に帰りたいという気持もあるでしょう。いろいろな悩みもあったと思うんです。ですから、そ

のときにちょっとポケットウイスキーを飲んで講義に出るとします。ちょっとぐらい顔が赤いかもしれませんが、飲んだ勢いで元氣な講義をやりまします。そういったものが案外また学生に受けたりして、そういった場面をちょっと想像して「下水道論の歴史的探訪」の中にも生かしたわけなんです。「下水道論の歴史的探訪」が昭和五五年ごろ、本になったものですからたへ子さんに送りましたら、それを読まれてとっても刺激を受けられたんでしょう。親戚のものにもあげたいから何冊か下さいと言ってこられたので、五冊ほどお送りした記憶がございいます。

私が言うのもおかしいんですけども、温い雰囲気といえましょうか、懐かしい雰囲気といったものに非常に刺激を受けられて、ともかくお母さん、あるいはベルツ・花さんから聞いた思い出を整理したいと思うようになられた気がするんです。それで、このノートに書くこうとされたわけです。いっぱい消したところがあるんです。何度も手を入れています。

でも、完成品じゃありません。結局、努力されたんですけども、しばらくして、引き出しの中にしまっってしまったような気がするんですね。恐らくたへ子さんが亡くなって遺品を整理するまでずっと引き出しに、多分十数年しまい込まれていたままのノート、あるいは原稿だと思っています。それをたまたま昨年「都市の医師」という本を水道産業新聞社が出してくれたわけです。その本を差し上げる必要もあったし、私も京都に居を移しましたので、ご挨拶にうかがったときに「実は母がこういうノートといますか、遺稿を残しました。」と言って見せて下さったわけです。

これを見まして、非常に残念に思ったことがあります。といいますのは、言葉は適当じゃないかもしれないんですけども、恐らくたへ子さんはもっと書きたかったはずなんです。一万字程度のものじゃなくて、もっともっと思ひ出があったはずなんです。それをうまく引き出す話し相手がなかったんですよ、きっと。

僕も五三年に初めて行って、五四年の一月に行つて、それから行っていないわけです。なぜか行っていないです。いろいろバルトン先生の調査などもその後断続的ですけども、ずっとやっているのに行つてなかったわけですね。要するに、私にとってはその当時、たへ子さんは、一人の調査対象者にしかすぎなかったのかもしれないんです。ですから、二度行つて、あと、手紙で何度かやり取りはしましたけれども、その程度しか行っていないんです。その間に彼女はその思い出を整理して書きたいと思つたんですが、話し相手もいません。思い出をうまく引き出してあげたら、いくらでも出てきたはずだったのにと、僕としては非常に後悔しているわけです。

その後、たへ子さんは長く住み慣れた家が実はバルの時代に地上げ屋の手にかかつて住めなくなつたのです。そして別の家に引っ越したりして、なかなか大変な苦勞を味わわれてもいたんです。そんなことで、今となつては仕方ないことですけども、バルトン先生の思い出をたくさん持ったままたへ子

さんは永遠の旅立ちをされてしまったわけです。

そういうことで、今となつては誰もその思い出の箱を開けることはできないわけです。この本があるだけです。以上「霧の中から」を出版することになりました経緯についてご報告します。ちょうどこの本が出したのは我が研究会が三回目のバルトン忌を開く年になりました。三という数字にも何となく意味があつたのかなというように思ひにとらわれているところでございます。以上、私の話はこれで終わらせていただきます。（拍手）